「震災・災害報道のあすを見つめて」は、コロナ禍で中断していた研究会の再開イベントとして 2022 年 5 月に開催しました。今回は 5 月の講話などを受けて、一線記者・デスクらが震災報道や災害報道のあり方を話し合うワークショップをメーンに企画されました。

3.11 メモリアルネットワーク理事で大川伝承の会の永沼悠斗さん(石巻市)が冒頭、取材を受ける被災者・当事者の視点で報道の課題を提起。永沼さんは取材後のフォローも含めて記者とのコミュニケーションの重要性を説き、共同作業としての震災報道の深化を呼びかけました。

その後、6 班に分かれてワークショップを実施。「震災報道と災害報道の悩みや課題」「その解決策」をテーマに現場の声を出し合い、「震災 12 年に何を伝えるのか」「震災報道は何のためにあるか」といったテーマで意見交換しました。新聞、放送、通信の枠を超えて入社 1 年の記者からベテランデスクまで語り合う機会はこれまでなく、「報道現場の交流は新鮮で、視点を確かめ合う意義は大きかった」といった声が聴かれました。

研究会の今後の運営について幹事役・事務局から提案があり、報道責任者の集まりで研究会を位置づけ直し、現場の要望や意見を反映して持ち回りで企画を進める方向で体制を整えることが了承されました。

2023.2.4 河北新報社1階ホール

「震災・災害報道のあすを見つめて」

～みやぎ「災害とメディア」研究会 ワークショップ～

- 13:30 開会行事(研究会説明、趣旨説明)
- 13:45 第1部「永沼悠斗さんと考える～震災報道のこれまで・これから」
  - 大川伝承の会・3.11メモリアルネットワーク 永沼悠斗さん講話 30分
  - 質疑応答 20分 ※永沼さんは以下2部も参加されます
- 14:25 休憩
- 14:40 第2部「震災報道と災害報道を語り合おう ワークショップ」
  - パート①(休憩) パート②(休憩) グループ討議の報告と総括議論
- 17:00 今後の研究会の進め方について・閉会行事
- 17:30 閉会解散

課題と悩み
E

①どんな悩みがあるか
B
悩みを解決するには
C

10年の壁
取材
弱
伝える意味
①どんな悩みがあるか
B
悩みで課題を解決するには
課題と悩み（D切）
課題と悩み
E
解決策
A
10年の壁
取材弱
伝える意味
②悩みを解決するには
B
課題と悩み
C
解決策（D切）
解決！
E

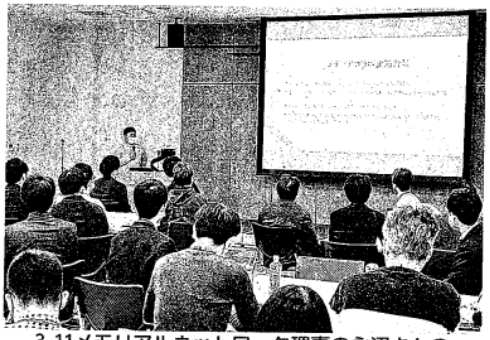
震災報道 課題探る

仙台「災害とメディア」研修会

いのちと地域を守る

宮城県内の新聞や放送の記者、大学の研究者でつくる、みやぎ「災害とメディア」研究会は4日、仙台市青葉区の河北新報社で研修会を開いた。約50人が参加し、東日本大震災から12年を迎える被災地での震災報道の課題について意見を交わした。

第1部は東日本大震災の伝承活動を支援する「公益社団法人3・11メモリアルネットワーク」（石巻市）理事の永沼悠斗さん（28）が、「震災報道のこれまで・これから」と題して講演した。



3.11メモリアルネットワーク理事の永沼さんの話を聞く参加者＝河北新報社

大川伝承の会で語り部をしている永沼さんは「語り部活動は震災に関心のある人が対象だが、報道は不特定多数の人に情報が届く。関心の有無に関係なく人の命が守れるように、メディアと同じ方向を向いていきたい」と述べた。

一方で、取材を受けて「思いがうまく伝わらない」「事前に取材の趣旨が知らされなかった」といった経験をしたことを明かした。報道機関と語り部がより良い関係を築き、命が助かる社会の実現という共通の願いを果たすため、取材前や報道後の丁寧なコミュニケーションを呼びかけた。

第2部は記者らが6班に分かれて、震災報道の悩みを共有。「被災者にどう話を聞いていいのか分からない」「社内で伝承されていない」といった声が上がった。

会社の垣根越え 災害報道研究会

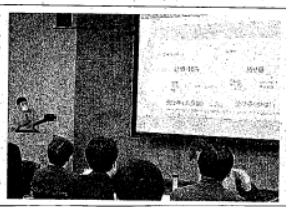
仙台 45人が参加

県内で震災取材に携わる記者たちが、社の垣根を越えてよりよい報道のあり方を探る「みやぎ『災害とメディア』研究会」が4日、仙台市内で開かれた。各社から約45人が参加。東日本大震災の発生から来月で12年になるのを前に、課題をワークショップ形式で話し合った。

基調講演で、石巻市の大川小学校で弟を亡くした語り部の永沼悠斗さん（28）が、各社の取材を受けてきた経験を基に、当事者とメディアの望ましい関係について話した。

「すでに報道されていることを予習せずに一から聞く記者がいる」と苦言を呈す一方、「ハード整備は終わったが、被災者の心の動きなど目に見えない部分の変化を追い続けてほしい。災害に関心のある人、ない人、両方の命を守るため、メディアと協働で情報発信していきたい」と語った。

ワークショップでは、災害報道の意義や、当事者の心情に配慮した報じ方について、意見交換した。（星乃勇介）



各社の記者に講演する永沼さん＝仙台市青葉区

語り部講演 震災報道考える 仙台

県内の報道機関や研究機関などでつくる「みやぎ『災害とメディア』研究会」が4日、仙台市青葉区で開かれ、報道関係者ら約40人が東日本大震災や自然災害の報道の在り方について意見を交わした。

震災で家族を亡くし、語り部活動を続けている「3・11メモリアルネットワーク」理事の永沼悠斗さん（28）が講演。被災者に取材意図が伝わらない場面が少なくなかったとして、信頼関係を築いた上で取材することが重要と指摘した。「震災から10年が過ぎ、震災報道の意義は深まっている。（被災者と報道が）協力して命が助かる社会をつくっていければ」とも語った。

ワークショップでは、グループに分かれて震災報道の課題を共有。「命を守るために何を伝えるか」「震災報道が3月11日付近に集中しがち」といった課題にどう向き合うべきか議論し、グループごとに発表した。

報道関係者に講演する永沼さん（4日、仙台市青葉区で）